

婦人関係資料シリーズ  
参考資料才五七号

# 「集団と個人」についての問題点

—— 婦人問題研究会議より ——

労働省婦人少年局

## は　じ　め　に

婦人少年局では「集団と個人」の問題をテーマとして、オ十一回の婦人週間を展開しましたが、婦人週間を終つて、今年のテーマ及び行事等の全国的反響について検討するとともに、さらに「集団と個人」に関する今日の問題点を究明するために、婦人問題研究会議を開催しました。

ここに会議の一部を要録し参考に供します。

昭和三十四年七月

労働省婦人少年局

婦人問題研究会議

一日時 昭和三十四年五月二十九日(金) 午後一時半〜四時

一 場所 虎の門共済会館

一 出席者

朝日新聞社論説委員

評論家

東京農工大学教授

読売新聞社出版委員会幹事

東京都立大学助教授

(順序不同)

(全国婦人会議オ一部会リーダー) 伊藤 藤 昇

(全国婦人会議オニ部会リーダー) 坂西 志 保

大谷 省 三  
(全国婦人会議オ三部会リーダー)

渡辺 智多雄  
(全国婦人会議オ四部会リーダー)

三井 為 友  
(東京会議助言者)

評論家

西 清 子

日本放送協会婦人課長

江上 フ ジ

主催者側

労働省婦人少年局長

谷 野 せ っ

労働省婦人少年局婦人課長

(司会) 高 橋 展 子

一 議題

1. 第十一回婦人週間の反響

テーマ並びに行事について

2. 「集団と個人」についての問題点

(1) 婦人会議を通して把握した問題点

(2) 網羅的集団の問題

- (3) 多数決の問題
- (4) 大衆化現象に起因する問題
- (5) 若い世代に見る「自由」の問題

## 「集団と個人」についての問題点

### (1) 婦人会議を通して把握した問題点

高橋 「集団と個人」に関して今日、どんな問題があるかということについてまず婦人会議を通して把握された点を――

大谷 私の部会では、深刻な家庭内での問題に悩んでいる人が一人あったが、そのほかの人の家庭は大体民主化されているようで、嫁と姑の問題は出なかった。嫁と姑の問題は一応解決して、今は夫婦の問題になったという感じであった。農村で今一番問題に悩んでいるのは、部落や婦人団体においての、ボス支配のことである。――婦人団体になぜボスができるか、このことをつづこんで話しあった。部落の婦人団体が行政機関の末端の町村の仕事を下請をさせられている。そういう仕事を手伝って処理していかねばならないが、そういうことができる人は、ひもと経済的余裕のある人であるから、村のボスと婦人会のボスは同じ人になってしまう。結局、婦人会は行政機関の補助機関みたいなものになっているのだが、これをどうしたらよいか。村に

は金がないから人質を強取できないというが、貧乏はただでなく、金の使い方までた  
らめてある。というように村政のことまで我下げて話しあわれた。

江上 たしかに、嫁と姑のことはあまり云わなくなった。現在では、その抵抗を選挙やそ  
の他の自分のコミュニティの問題に匂けるようになったのだと思う。嫁・姑のことは  
とばかりかしこいという態度で外に出しては云わなくなったが、家にそういう問題がな  
くなつたわけではないと思う。

渡辺 部落集団と婦人会・農協などを比べてみるとオニ次集団に対する意識があまりで  
オニ次集団とオニ次集団のあいだにくっきりしたものが無い。オニ次集団は機能集団  
になりきれないでオニ次集団の古い考え方を追っている。オニ次集団の中にも階級的  
なつながりをもつことを当然だと考えている。

高橋 どういうことから、そうなるのか。

大谷 さつきも云つたように、仕事のできる人は、余裕のある人だということから出てい  
る。Iさんの場合のように、上から仕事をもらい、ジャンジャン仕事をして、たくさ

ん金をもらって会を大きくしていく。しかし、これは未分化の集団である。農村の場  
合、一段階前の段階である。

高橋 機能集団になつてはいないのでですね。外国の農村は、こういうことはどうですか。

坂西 個人がちゃんと確立しているから、日本のように団体をたよりにしていない。経済  
的・利益から協同することはあるが、また男女の生活が分かれていないから、婦人会  
というようなものも、日本の場合と大分違っていると思う。

私の部会では、皆、あまり集団というものに関心を持っていないように感じられた。  
ただ教育の点で、日教組とPTAの関係をどうしたらよいか。教育委員との板はさみ  
にさるか、子供のことを思うと、どうしたものかと迷うというようは問題が出た。  
できれば大きな団体から脱離して、余裕があれば自分が主宰して小さなグループを作  
りたいという気持ちの人が多かった。隣近所についても「我関せず」という、団地生活  
の最も極端な個人主義の例があった。

大谷 もう一つ挙げたい面は、農村の婦人が急激に進んできたことである。婦人が家庭の  
外へ出て会合を持つことでトレーニングされ、大変教育されたのだと思う。考えをま

とめて、云いたいことを発言するといふ力ができた。また、農業生産の発展にともな  
つて、実収を婦人が運る面が多くなつて、家庭のいざこざは少なくなつてきたのでは  
ないか。

伊藤 松山で、東京の全国会議に出席した人達が発表したのをきいたが、他所の婦人会は  
低いと批判していた。自分たちだけが余程進んでいるように思っているように思えた。  
松山は社会教育日盛んで、号外ですぐ集まるが、実際はそれほど進んでいない。一應  
のみえて、自分たちだけ進んでいると思つてゐるが、反省が足りないと思う。PTA  
などにも、既成の婦人会と同じ考え方で入つてゐる。労組の人は大体組織の中に埋没  
して安心しきつてゐる。だから婦人会活動で苦勞してゐる人が集向すると答へられ  
た。はつきりした人間が出来つつあるが、北海道の王子製紙の例をとつて、一月スト  
ライキすれば、会社も労組もそれだけ損をして、くえなくなるのではないか――な  
どときかされると、わからなくなつてしまふ。というような状態だった。

渡辺 農村の婦人会で、年貢のこととか、用水のことなど、いつも同質の問題だけでもみ  
あつてゐたのでは、他の問題に急にパツと切りかえることができない。結局一つの婦  
人会だけで、いくらやつてみてもだめなように、これからの会議には、少し異質なもの  
も入れたら、他との交流で違った角度からの見方もあるといふことを考えるように  
なるのではないか。

坂西 地方にいつてみると、初めは、持ちつ持たれつの相互意識だったのが、それから離  
れて疎隔意識におちいつてゐるということを感じた。互いに考え方の違いを話しあつ  
て理解しあつて広くくうして、いこうとするのではなく、いやなら勝手にすればよい  
という態度でつっぱねる。

西 労組の中の、男女の対立で、そういうのがとても出てゐる。男性の中に入つていつ  
て説得するのではなくて、組合に入つていれば何かしてもらえるからといふのでつい  
ていく。

江上 青山さんという会議員――この人は家庭の主婦――から手紙をもらったが、自分は  
農村に住んでいないのに農村の部会に入れられたが、それが大変意義があつたと書  
いてよこした。これからみても、立場が違ふ人で会議をしてもよいのではないかと思  
う。立場がちがつて話がわからなければ出ていくといふのではいけないと思う。

西　オニ部会で、だんだん小集団にあっていく傾向があるという話が出て、なぜそう

なったかという質問を坂西先生がされたが、それも答えられなかった。

坂西　一人でできるといふ自信を持っているから、そうなるのだと思う。いやなら出ればよいという考え方は非常に安易である。

高橋　終戦直後はたしかに持ちつ持たれつで、それに共通のゴールがあるような感じかたもあって、一緒に足なみをそろえてできた婦人会も、だんだん分化してきた、しかしそれは歴史的な流れではないか。

渡辺　婦人会は再編成の段階に来ていると思う。

坂西　それにはしつかりしたリーダーが必要だと思う。大きな愛情をもって進んでいく努力・忍耐が欠けている。グループを作っては抜け出している。そして方向のわからないかわ方をしている。

## (2) 網羅的集団の問題

高橋　網羅的集団が批難の中心になって、それをこわして小グループになったが、小グループにもまた問題があるようだ。網羅的集団の功罪というふうな事についてどうぞ。

坂西　私の部会の東京の会議員が、「大きなグループをさけて、小グループを作ったが、

小グループが大きなグループに浸透していかねければならぬ」と云っていた。

三井　自分が作ったグループを抜け出すのはたしかに無責任だと思う。しかし、自分が町会やPTAなどに入っただけの場合、いやでもなかなか抜けられぬ。そういうときに、抜け出せる人は、また別の意味で大成功人だと思う。この勇氣は大成功だ。

江上　大集団に入っているのは恥かしいという人がある程、今は小グループが流行している。

渡辺　大集団と小集団はそれぞれ目的がちがうことを理解していない。

大谷　すべて必要によって存在するもので、大集団は必要でできたのではないから、ボスに牛じられるのである。そういう意味から言えば、進化の道程で大集団から抜けるのは、むしろ本物かもしれない。

高橋　ある調査では、長野県に会員三百人の団体があるが、その中で会を統括した人は二十人しかいなかったそうである。と言ってもやめもしない。

渡辺　農村では、婦人団体に入る必要がないと思っても、抜けられぬようになってくる。

大谷 婦人会というのは太てい、会員がつくるのではなくて、別の人がつくって、会費を入れる。かざり名の通ったある婦人会の会長は、その団体のための集団的な活動は、むしろないで、あらゆる場所に顔を出している。それでも解散もしない。そういう会は全く個人のための組織である。

坂西 農協の調査によると、会員三千人となっているが、これは本部でたいいの見当で書きこむもので、実際には二千くらいしかいない。農協では会費もとっていないし、組織についても分っていない。

大谷 ボスの牛耳っている会では会費を取らない。自分のための組織がこわれるからである。高橋 まず団体にひっぱり出すことが必要ということ。善意でやっているものもある。

伊藤 網羅主義の功績は農村の婦人をひっぱり出したこと、物を考えることを教えたことである。ただ出っぱなしではこまる。

小グループには排他的になる傾向があるが、これはどうしたらよいか。青年団がそうである。

渡辺 大集団では学習活動はできない。しかし、社会教育活動の大きな組織は一つの力

もある。小グループも、共通の問題の時には、たがいに手を握れるようにしておくことがよいのではないか。

伊藤 小グループ同士が互いに協同することがよい。

三井 大集団と小集団の、それぞれのレーゾンデートルをよく知ることである。大集団の中の小集団というのものもあるが、基本的には、小集団のエネルギーを集めて大きくするには永い年月がかかる。集団を持たない個人というものは自己主義におちいるし、集団の中でのみ個人は確立するものだから、大集団の中の、めざめた人たちの力で進めていくよりよいと思う。

大谷 農村の中では農業技術、農業経営など、理詰めの研究委員会が発達したが、初めは男と青年だけだったが、これに婦人が加わるようになって、がっちりした根ができた。三井 網羅的な集団は意味がないということ。もう一度はつきりさせておきたい。

### (3) 多数決の問題

高橋 多数決で物事をきめる場合、少数意見の尊重ということがなかなかむづかしい。これをどうしたらよいか。

坂西 多数決ということとを神祕のおふだみたいにして、理論的にはわるいことは決して多数決にほらないものである。しかし、そうなるためには、決を取る前に十分話しあうことである。婦人団体では、よく「おはかりいたします。御意見なければ採決いたします」というが、これは困る。

大谷 私は綱領主義と云っているのだが、大学の講座を決める時でも、なかなか大変で、採決はするまでは両方ともゆすうない。いくら話しあっても綱領の定まらぬ人があつて、結局がはんまり通す人の意見が通つてしまふ。こういうことは、この団体にもあるようだ。

西 中共へ行つて感じたが、中国の人ほどとも気が長くお互いに綱領のいくまで話しあつてきめるのが習慣になつてゐる。視察団のスケジュールを定るにも三十人のグループの全部の人が、そういう意見がしとされ、もう一度、皆の意見をきいたら、皆の意見がそれそれだ、大変困つたことがあつた。  
渡辺 山形で全員一致できめることがあるが、全員綱領しなければ決めない。反対があれば徹夜で議論することもある。

江上 全員一致ということはなかなかないから、徹夜しても結局どうどうめぐりではないか。だから多数決で決めても、必ず、何票反対意見があつたということをつけ加えるべきだと思う。

伊藤 私たちの時代のもものは話しあひの訓練ができていないから、多数決ということに疑問ばかりもつ。この頃の子供は多数決できまつたことは守るものだと思つてゐる。いまやられてゐるのは、ほんとうの話しあひではない。

三井 ぶつてしまふ、討論になつてしまふ。

江上 東京会議で集団の中で共通の場はないかということをお考えあうと、三井先生が云われたが、あれはよいことだと思う。

(4) 大衆化現象に起因する問題

高橋 大衆化現象ということが云われるが、日本ではどんな現象を起してゐるか。外国では新しい次元で個人が抹殺されてゐる、と言われているが。

三井 日本ではそういうのは青少年にある。足が雷に尊んでゐる。

伊藤 私の部会の一人がマスコミが均等化した人間をつくるのではないかと云つた。しかし大衆化現象という意識はないようだった。労組の中では、皆が同じ形になつてゐる

が、自分たちはそれに気づいてはいない。当組合の中では皆同じことしか考えない。組合に寄りかかりすぎてゐる。そういうところに大衆化現象が出てゐるように思う。

大谷 農民組合にはないと思う。

江上 組合の中ではいま、今まで一人一人の自主性を高めることをなして来なかつたということについて、反省が出てきてゐるのではないか。婦人会の中には、「まだあんなことなつてゐるのか」ということを得意でいう人があるが、これも一つの大衆化現象ではないか。自分のほうはとくに卒業したという考え、評判で終したように同じことを云うので、これが一番面白くなかつた。

三井 愛媛の人には自分たちは進んでゐると思つてゐるが、実際はそうではない。これも同じ現象ではないか。

伊藤 日教組も同じである。命令によつて動いてゐる。組合員大衆は安心しきつてゐる。

三井 確立した個人がないからである。

(5) 若い世代に見る「自由」の問題

高橋 若い人々は自由をはぎちがえてゐると言われるが、自由の定義が世代によつて違う

のではないか。という問題もある。それに関連して、英語の「リバティー」と「フリーダム」はどう區別したらよいか。先ほど坂西先生にうかがつたが、「リバティー」は一般的に自由、拘束のない状態を云ひ、「フリーダム」は、フィジカルな、精神的、ウィックな——奴隷でない状態を云うということであつた。言論の拘束がなくなつた時、「フリーダム・オブ・スピーチ」という。フランス語では「リベルテ」だけでフリーダムにあたる言葉はない。

三井 ドイツ語では、フライハイト一つ。

高橋 若い人は傍若無人であるといわれているがどうか。

江上 一人きりでいて自由はあり得ない。集団の中で初めて自由がある。一人だったら自主性もない。傍若無人の行動は若い人だけでなく年寄にもあるし、貧富にかかわらずある。

伊藤 若い世代は絶対に自由を要求する。また、既成概念とか、おとなのやつたことに非常に反発する。こういう反発の精神は明治時代にもあつたし、ロシア革命のときにもあつた。しかし、今の若い人たちは、ぼくたちの若い時代のように、個人的な自由は

要求しない。グループの中で仲間といっしよにする。昔より集団意識はある。こういう反抗心はおとなへの抵抗と云える。

江上 今の世代の若い人たちがはきちがえているとは思われない。いつの時代でも若い人は同じだと思う。おとなの方がむしろはきちがえていゐるのではないか。

大谷 日本では自由を大家の手で戦いとうないから、わからないのではないか。日本にはルネッサンスもない。私は成佛することが、ほんとに自由になることだと思う。佛の道は「ホドケル」道である。悟りを開くことは、あらゆる制約から解放されることである。この段階に人間が達するまでには、ずいぶん人間は戦わなければならぬ。私は人間の自由を得る戦いの段階として次の四つをあげたいと思う。

- ① 自然に対する戦い。
  - ② 社会的自由を獲得する戦い。
  - ③ 経済的自由を得る戦い。
  - ④ 主観的自由を得る戦い——内面的なものとの戦い。
- 以上の四つのうち、③と④が統一されなければだめである。今は戦前より生活が豊

かになつてゐるが、自分たちがさういふ意識を持たなければ、豊かになつたと思えない。

人間社会では、この四つの戦いを戦いとうなければ、自由は得られないと思う。自分が戦いとうという意識がなければ自由になれないし、自分が人類社会のために戦つてゐるのだという意識がなければ、より高いものに到達することはできないと思う。

後略

